

世界聖餐日礼拝説教「あなたのために、わたしは生きる」

日本基督教団石神井教会 2016年10月2日

【使徒書日課】フィリピの信徒への手紙 1章12～30節

¹²兄弟たち、わたしの身に起こったことが、かえって福音の前進に役立ったと知ってほしい。
¹³つまり、わたしが監禁されているのはキリストのためであるが、兵營全体、その他のすべての人々に知れ渡り、¹⁴主に結ばれた兄弟たちの中で多くの者が、わたしの捕らわれているのを見て確信を得、恐れることなくますます勇敢に、御言葉を語るようになったのです。

¹⁵キリストを宣べ伝えるのに、わたしと争いの念にかられてする者もいれば、善意でする者もいます。¹⁶一方は、わたしが福音を弁明するために捕らわれているのを知って、愛の動機からそうするのですが、¹⁷他方は、自分の利益を求めて、獄中のわたしをいっそう苦しめようという不純な動機からキリストを告げ知らせているのです。¹⁸だが、それがなんであろう。口実であれ、真実であれ、とにかく、キリストが告げ知らされているのですから、わたしはそれを喜んでます。これからも喜びます。¹⁹というのは、あなたがたの祈りと、イエス・キリストの霊の助けとによって、このことがわたしの救いになると知っているからです。²⁰そして、どんなことにも恥をかかず、これまでのように今も、生きるにも死ぬにも、わたしの身によってキリストが公然とあがめられるようにと切に願い、希望しています。²¹わたしにとって、生きることはキリストであり、死ぬことは利益なのです。²²けれども、肉において生き続ければ、実り多い働きができ、どちらを選ぶべきか、わたしには分かりません。²³この二つのことの間で、板挟みの状態です。一方では、この世を去って、キリストと共にいたいと熱望しており、この方がはるかに望ましい。²⁴だが他方では、肉にとどまる方が、あなたがたのためにもっと必要です。²⁵こう確信していますから、あなたがたの信仰を深めて喜びをもたらすように、いつもあなたがた一同と共にいることになるでしょう。²⁶そうならば、わたしが再びあなたがたのもとに姿を見せるとき、キリスト・イエスに結ばれているというあなたがたの誇りは、わたしゆえに増し加わることになります。

²⁷ひたすらキリストの福音にふさわしい生活を送りなさい。そうすれば、そちらに行つてあなたがたに会うにしても、離れているにしても、わたしは次のことを聞けるでしょう。あなたがたは一つの霊によってしっかりと立ち、心を合わせて福音の信仰のために共に戦っており、²⁸どんなことがあっても、反対者たちに脅されてたじろぐことはないのだと。このことは、反対者たちに、彼ら自身の滅びとあなたがたの救いを示すものです。これは神によることです。²⁹つまり、あなたがたには、キリストを信じるだけでなく、キリストのために苦しむことも、恵みとして与えられているのです。³⁰あなたがたは、わたしの戦いをついて見、今またそれについて聞いています。その同じ戦いをあなたがたは戦っているのです。

【福音書日課】ヨハネによる福音書 11章28～44節

²⁸マルタは、こう言つてから、家に帰つて姉妹のマリアを呼び、「先生がいらして、あなたをお呼びです」と耳打ちした。²⁹マリアはこれを聞くと、すぐに立ち上がり、イエスのもとに行つた。³⁰イエスはまた村には入らず、マルタが出迎えた場所におられた。³¹家の中でマリアと一緒にいて、慰めていたユダヤ人たちは、彼女が急に立ち上がつて出て行くのを見て、墓に泣きに行くのだろうと思ひ、後を追つた。³²マリアはイエスのおられる所に来て、イエスを見るなり足もとにひれ伏し、「主よ、もしここにいてくださいましたら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょう」と言った。³³イエスは、彼女が泣き、一緒に来たユダヤ人たちも泣いているのを見て、心に憤りを覚え、興奮して、³⁴言われた。「どこに葬つたのか。」彼女は、「主よ、来て、御覧ください」と言った。³⁵イエスは涙を流された。³⁶ユダヤ人たちは、「御覧なさい、どんなにラザロを愛しておられたことか」と言った。³⁷しかし、中には、「盲人の目を開けたこの人も、ラザロが死なないようにはできなかったのか」と言う者もいた。

³⁸イエスは、再び心に憤りを覚えて、墓に来られた。墓は洞穴で、石でふさがれていた。³⁹イエスが、「その石を取りのけなさい」と言われると、死んだラザロの姉妹マルタが、「主よ、四日もたっていますから、もうおいます」と言った。⁴⁰イエスは、「もし信じるなら、神の栄光が見られると、言つておいたではないか」と言われた。⁴¹人々が石を取りのけると、イエスは天を仰いで言われた。「父よ、わたしの願いを聞き入れてくださつて感謝します。⁴²わたしの願いをいつも聞いてくださることを、わたしは知っています。しかし、わたしがこう言うのは、周りにいる群衆のためです。あなたがわたしをお遣わしになったことを、彼らに信じさせるためです。」⁴³こう言つてから、「ラザロ、出て来なさい」と大声で叫ばれた。⁴⁴すると、死んでいた人が、手と足を布で巻かれたまま出て来た。顔は覆いで包まれていた。イエスは人々に、「ほどいてやつて、行かせなさい」と言われた。

《世界聖餐日》の祈り

今から 70 年前、第二次世界大戦が終結した翌年、世界中の教会に、一つのことが呼びかけられました。10 月の最初の日曜日に、世界中の教会で、聖餐を祝おう。聖餐のパンと杯にあずかり、主の御体と御血にあずかり、わたしたちキリスト者が、ただ一つの「キリストの体」である教会に招かれている者であることを、世界中の教会で、世界中のキリスト者が、共に覚え、祈ろう。「世界聖餐日」の取り組みが、呼びかけられたのです。1946 年のことです。わたしたちの属する日本基督教団でも、その年、全教会に「世界聖餐日遵守」の通知がされ、それ以来、世界聖餐日は教団の行事日として覚えられてきました。

石神井教会の 58 年の歴史の中で、世界聖餐日がどのように覚えられてきたのか、あるいは覚えられずにきたのか、わたしは、まだ過去の資料をすべて確認することができずにいます。少なくとも、近年は、特別に世界聖餐日を覚えてということは、あまりしてこられなかったのではないのでしょうか。その皆さんに、わたしは、あえてチャレンジを受けていただきたいと思いました。世界聖餐日を覚えていただき、その意図するところを、礼拝を通してこそ、心に留めていただきたいと考えました。この、皆さんがお集りの礼拝を、いつも通りにではなく、あえて普段とは違う形で整え、皆さんにあずかっていただくことにしたのです。

礼拝のここまでの中で、すでに、普段と違うところがあるのにお気づきだったでしょう。あわてて週報の礼拝順序を見直された方もいらしたかもしれません。しかし、まだ序の口です。この後、今日は聖餐の祝いにあずかりますが、そこに至るまでの順序が、普段とはかなり違ってくるのです。まず、信仰告白に続いて「とりなしの祈り」をいたします。そして、それに続いて、わたしは、皆さんに「平和の挨拶」を交わすようにと、申し上げるでしょう。前後左右の方と顔を向き合わせて、「主の平和」「キリストの平和」「シャローム」といった言葉を交わして、挨拶をするのです。そして、それが終わると、「報告」を経て「献金」です。「聖餐」は、「献金」の後になります。

この一連の流れは、古代教会以来受け継いできた一つの共通の礼拝式に倣ったものだと言われています。わたしたちの日本基督教団では、10 年前に発行した新しい『式文（試用版）』で、このような礼拝順序が、これからの教団の礼拝の基本形として提示されました。この礼拝順序に沿うことによって、伝統的な多くの教会と同じ礼拝観を共有することになるのです。

皆さんが戸惑われるかもしれないことを承知で、この礼拝順序で整えることを、役員の皆さんと決めました。礼拝は、理屈ですべてを受け留めるものではありませんから、仮に皆さんが抵抗を感じるとしても、それも当然のことです。それでも、この礼拝順序を通して、皆さんの礼拝に対する姿勢を自己吟味していただきたいのです。ことに「平和の挨拶」で見ることになる風景を、心に留めて、思い巡らしていただきたいと思っています。そして、その風景の中で、「献金」、「聖餐」へと向かって行っていただきたいのです。この礼拝順序は何を意図しているのでしょうか。それに対して、皆さんの心はどう動いていくのでしょうか。

「石を取りのけなさい」

11月に、教会の行事として「オープン・チャーチ」を計画していただいています。従来、石神井教会では、「秋の特別伝道礼拝」としてゲストの講師をお呼びして行っていた行事がありました。その装いを大きく変えて、皆さんの周囲の、教会は敷居が高いと思われるような方に気軽にこの会堂に足を運んでいただける「開かれた教会の一日」にすることが目標です。

その第一歩は、「開かれた扉」にすることもかもしれません。4月に着任して以来半年、日曜日の午前中は、できるだけ正面玄関の扉を開放しておいてもらいたいと考えてきましたが、今までは閉じておく習慣があったのでしょうか、気がつくと扉が閉じられているということがよくありました。安全上の問題もありますが、教会の外を通りがかった人が見て、入り口の扉が開いているか、閉じているかは、すでに大きな違いです。入口の扉が開いていれば、「自分も入ってもよいのかな」、「覗いてみようかな」と思うでしょうし、閉じていたら、「部外者は入りにくい」と思われるでしょう。

けれども、たとえ両の扉が開放されていたとしても、迎えるわたしたちに歓迎する気がなければ、結果は見えています。もちろん、皆さんは、新しくおいでくださる方を拒絶するようなことはないと思います。声を掛けて挨拶をしてくださる方も多いと思います。そうだとすると、実際には、一度おいでくださった方が、また二度目においでくださる割合というのは、どれほどのもののでしょうか。

わたしたちの教会のルーツの一つは、アメリカのメソジスト教会にありますが、現在の合同メソジスト教会のインターネットのサイトを見てみると、必ずと言ってよいほど掲げられている言葉があることに気づきます。「オープン・ハート、オープン・マインド、オープン・ドア」という言葉です。「心を開いて、思いを開いて、扉を開いて」とでも訳したらよいのでしょうか。自分たちの教会は、すべての人に対して、心を開き、思いを開き、扉を開く教会になろうとしているのだという姿勢を表しているのでしょうか。そのように掲げられなければならないほど、実際には、教会というところであっても、キリスト者という人たちであっても、わたしたちが、心を開いて、思いを開いて、扉を開放して、どんな人も迎えるというのは、難しいことなのだと思います。

今日の福音書の中で、主イエスは、死んだラザロが葬られた墓においでになられて、入口をふさいでいた石を取りのけさせられています。「その石を取りのけなさい」。その石の向こうには、死んだラザロが眠っていました。いいえ、周りの人たちによって、死んだラザロは、その石の向こうに葬られ、閉じ込められたのです。しかし、そこに閉じ込められていたのは、ただ「死んだラザロの遺体」だけではなかったはずで、ラザロの周囲の人たちによって、ラザロという一人の人間存在が、その石の向こう側に閉じ込められたのです。その全身を覆い隠されて、目につかないところに押しやられ、閉じ込められた。その「石」は、ラザロの命を閉ざす「石」でしたが、同時に、ラザロの周囲の人たちのラザロに対する心を、思いを閉ざす「石」でもあった。そう言えるのではないのでしょうか。

百

この物語の中で、主イエスは、ラザロやその姉妹たち、そしてその周囲の人たちの、閉ざされた心を嘆かれていらっしやるのではないのでしょうか。彼らは、閉ざされた思いで互いを死に追いやってしまっている。だから、主イエスは、幾度も心に憤りを覚えられたのでしょうか。「なぜ、お互いに対して、心を閉ざし、思いを閉ざし、扉を閉ざしてしまうのか。お互いを死の闇に追いやってしまうのか」と心憤らさずには、いられなかったのではないのでしょうか。

「石を取りのけなさい」、「ラザロ、出て来なさい」、「ほどいてやって、行かせなさい」。そう、ラザロの村の人々とラザロとに告げられる主イエスは、ただ死んだラザロを蘇生させられただけではないのでしょうか。ラザロを、人々のもとにお返しになり、ラザロと人々とをもう一度、結び付けてくださったのでしょうか。心を開かせ、開かれた思いで、互いの存在を受け入れ合うことができるようにと、導いてくださったのでしょうか。

フィリピの教会に宛てた手紙を、使徒パウロは、獄中に監禁されながら、書いていたようです。どのような監獄だったのでしょか。重たい扉で閉ざされていたのか、武装した兵士によって厳重に出入りが管理されていたのか。いずれにしても、パウロを支援しようとしていたフィリピの教会の人たちは、獄中に監禁されているパウロの境遇を、嘆き悲しんでいたのです。パウロが自由に活動し、福音宣教の働きが大いに進むことを期待していたフィリピの教会の人たちにとっては、獄中に監禁されたパウロは、もはや死んで失われてしまったのに等しく思われたのかもしれませんが。パウロが活動できないでいる間に、他の者たちが、パウロとは違った形で宣教活動をして、教会の人たちに影響を与えていることが、我慢できない思いでいた人たちもあったかもしれません。

けれども、パウロは、自分の境遇を嘆いたりしませんでした。自分が獄中に監禁されている間に、他の者たちが活動し、教会の状況に変化が生じていることさえ、肯定的に考えていました。「口実であれ、真実であれ、とにかくキリストが告げ知らされているのですから、わたしはそれを喜んでいます」と言って、フィリピの教会の人たちにも同じ思いを持ってほしいと訴えているのです。

パウロの心は、開かれていたのでしょうか。パウロは、開かれた思いを与えられていたのでしょうか。だから、パウロは、閉ざされた獄中に置かれながら、その扉は開かれていたのです。物理的には閉じていても、自分はどこにも閉じ込められてない、この扉は世界に向かって開かれていると、そういう思いを与えられていたのでしょうか。そして、主のために、人のために、自由に生きることができた。

そのような心をパウロに与えてくださったのは、主イエス・キリストに他なりません。開かれた思いを持つようにパウロを導いてくださったのは、霊をもって結びついてくださっていたキリストに他なりません。

キリストに結ばれましょう、洗礼によって、聖餐によって。主は、わたしたちの心を開いてくださる。開かれた思いをお与えくださり、この世界に解放してください。自由にされた者は、主のため、人のために生きることができるのです。